

能登半島地震と「夢洲万博」

久しぶりに「大阪市長会見全文」をチェックした。1月18日の会見では、共同通信の鶴留記者が、今回の地震を受けて、万博の防災基本計画（昨年12月に初版）についても安全確保の点で検討していくのかと質問。横山市長は「今回の地震が、大阪で発災すると想定される新たな地震が見つかったわけではなく」などと述べ、防災計画が大幅に変わるという認識ではないと。

フリーライターの木下記者が関連して、能登半島等のショッキングな液状化により、夢洲の対策を見直さないかと問いただす。横山市長は「何か新しい地震のリスクが見つかったわけではありません」「想定されてる地震のリスクに応じて、技術的に土地の施工がされていると認識しています」などと回答。

横山市長の答弁はきわめて楽観的であり、能登半島地震の深刻な被害から学ぶ姿勢に欠けている。大阪市民の命と暮らしを守る市長として「想定外」では済まされないのだ。

フリーライターの木下記者は、元大阪日日新聞記者であり、夢洲万博やIRカジノについて鋭い記事を書いてきた。市長会見でも、松井市長の時代からいつも厳しい質問を市長に投げかけている。

5日レポートで紹介した3日「夢洲IR・カジノ市民学習会」で、木下記者も登壇者として、「夢洲リスク」について万博協会など関係機関への緻密な取材により、万博やIRカジノの災害リスク、災害対策の欠陥を鋭く指摘した。

写真下は南海トラフ巨大地震による液状化予測図。赤い色ほど液状化が激しく、グレーは「なし」という。夢洲の西から中央からにかけて、果たして液状化はないと言えるのか。専門家の見解を聞きたいものだ。「激しい」と表示されている夢洲IRカジノ予定地あたりで、昨年12月4日から液状化対策工事が始まっている。

問題は咲洲と舞洲の大半が赤や黄で表示されていることだ。夢洲は咲洲とはトンネル、舞洲とは橋で結ばれている。この2本が唯一のアクセスで、その脆弱性が問題視されてきた。30数年で8割近い確率で起こるとされる南海トラフ巨大地震により、夢洲から安全に避難できるのか。まずは万博であり、来場者避難・帰宅イメージ図を見ても、リスクが多すぎる。IRカジノは最低35年間の営業予定であり、災害リスクはさらに高くなる。

(2024年2月8日)

